

きょういく eye

きょういく アイ

— Information for Boards of Education —


KAIRYUDO
2006 vol.1-02

巻頭言

アレンジに期待

玄侑宗久

この四月から、校長先生や教頭先生による先生方の評価が始まった。先生方の質の低下を防ぐため、その評価によっては再教育なども考えているらしい。しかもその際、先生方自身にも自己評価させ、それも参考にすると云うのだが、いったいどんなふうに「参考にする」のだろう。

私も教育委員を二期八年務め、最近も校長先生たちと話す機会が多い。やはり現場の校長先生たちは戸惑いが隠せないようだ。校長評価の影響の大きさもさることながら、何より校長先生たちは、自己評価の扱い方に戸惑っているのである。

おそらくこの制度は、欧米など、子供の頃から自己評価や自己アピールに慣れた国に発したものだだろう。そこでは、高い自己評価はそのまま高く「参考にすることが」できる。しかし日本という国柄を考えると、これはどうしても馴染まない。謙譲の美德もあり、惻隱の情もある。つまり、自己評価が高いということが、この国では自惚れが強いことにもなり、また自己反省が足りないことも意味するのだ。

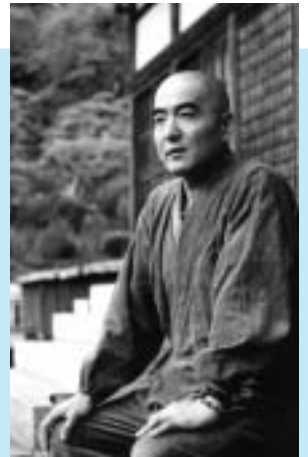
外国の制度を採り入れようとするなら、まずは日本

風アレンジする必要があるだろう。この点について日本は優れた文化的蓄積を持っていたはずである。漢字から仮名を作り、また新たな仏教宗派まで創出してしまった。これらも驚異的なアレンジ力の賜物だろう。

このままの形で自己評価が続けられると、その制度に人の心が引きずられるのが怖い。つまり先生方だけでなく生徒たちも、やがては欲望に正比例する自己評価を臆面もなく書き付けるようになることを私は危惧するのである。アピールしたほうが勝ち、というのでは、あまりに日本らしくないではないか。

日本語では一人のヒトのことを「人間」と呼ぶ。これは中国語だと世間の意味だが、それほどに我々は関係性を重視し、その和合のうちに自己実現もなされていくと考えているのだろう。

評価はあくまでもお互いを高め合うための刺激にすぎない。そう腹を括って、現場には現場なりの日本のアレンジを期待したい。そうでないと、この制度は日本人の美德を踏みにじるだけに終わるだろう。



●げんゆう そうきゅう●

「1956年、福島県生まれ。慶応義塾大学卒業。さまざまな仕事を経験後、京都天龍寺に入門、現在、福島県田村郡三春町福聚寺副住職。2001年『中陰の花』で芥川賞受賞。著書に『水の軸先』『アマターバ』『禅的生活』など多数。各地での講演もおこなっている。」

目次

アレンジに期待 玄侑宗久	1
1000時間体験学修が教員養成を変える 高岡信也	2,3
—島根大学教育学部の挑戦—	
家庭科再発見 —気づきから学びがはじまる—	4

1000時間体験学修が教員養成を変える

～島根大学教育学部の挑戦～

高岡信也（島根大学 教育学部長）



1 教育改革は教師養成の改革から

前世紀末から始まった教育改革は、現在も継続中である。私はこの改革の成否を握るのは「教師」だと考えている。さらに言えば、改革の担い手である「教師」を育てる教師養成のあり方次第だと考えている。まさに「国家百年の計は教育にあり」だとすると「教育百年の計は教師にあり」と確信している。

ここ数年中央教育審議会で議論されてきた教師をめぐる制度改革案がまとまりつつある。まもなく「答申」が出される。「答申」は、教員資格全般に関わる大がかりなものようだが、養成教育の分野では、学部、大学院教育のそれぞれで抜本改革の方向が示されるという。その主眼は、専門職としての教師の資質の向上、養成教育の質の確保と高度化にある。「学校を変えたい、変えなければならない」という願いは、教師養成システムの改革に辿り着いた。

2 発想の転換

平成十六年四月、島根大学教育学部は、全国初の教員養成特化型学部自ら転換した。国立教員養成系大学・学部の再編・統合の動きの中で、県境を越えた協議の末にまとまった唯一の成功事例である。もちろん、転換は単に看板のつけ替えではない。新生教育学部としての自己再生であり、高度で専門的資質を備えた教師を育てる新たな養成システムの構築でなければならない。めざすべきシステム構築のキーワードは、言うまでもなく「高度な教育的実践力

を有する教師の育成」であり、専門職養成学部としてのミッションをより高い理想を掲げて追求することを表明する変革である。

二年以上におよぶ学部の改革論議の過程で、様々なカリキュラム構想が提出された。しかしそのいずれもが、私には「食い足りない」ものに見えた。教師養成の本質を突いた抜本的な養成プログラムはできないか。常識を覆す発想が必要だが、それは常識の範囲からは生まれない。点検が始まった。

医療系の実習が目に入った。医者はもちろん、看護師や医療技術者養成においても、臨地実習は1000時間を超える場合が多い。教師養成の根幹である「教育職員免許法」はわずか5単位（ほぼ、200時間）で良しとしている。ここにわれわれの常識があり、発想の転換を妨げる原因があることに気づいた。

そんな経過を経て、本学部は、教師になるために「四年間で1000時間の子ども、学校、教育体験」を課すという決断をした。学生への負担加重を危惧する声はもちろんあったが、現代の教師に必要な資質として、子どもや学校に関する体験的理解の重要性は誰も否定しなかった。

私は、あえて言えば、この取組は現代の大学教育に対する大いなる実験であり、挑戦だと考えている。大学に期待される人材育成機能を本気で担おうとする時、全国一律の制度的枠組みを超える「何か」が必要ではないか。「教師を育てる」という教育学部の社会的使命を達成するために、学部構成員は、学生一人ひとりの教師としての力量形成に本気で取り

島根大学教育学部「1000時間体験学修」の位置づけと期待される効果

20単位	パッケージ・カリキュラム 副専攻 専門科学教育科目 教科教育学教育科目 教科内容構成研究	期待される効果 1. 専門科学等学修と体験学修の往還がもたらす実践的思考力の開発 2. 生きた子どもとの直接的接触がもたらす深い子ども理解 3. 社会参加、ボランティアによって培われる社会的成熟性、行動力、自己学習力 4. 多様な体験がもたらす教育実践力、教職への意欲	教育臨床体験領域 教育実習体験	400時間
52単位	パッケージ・カリキュラム 主専攻（11領域） 専門科学教育科目 教科教育学教育科目 教科内容構成研究 卒業研究		心理臨床・カウンセリング 体験領域 カウンセリング実習 特別支援教育体験 不登校児童指導体験	200時間
26単位	教職基礎科目		教育基礎体験領域 子ども体験活動 社会体験活動 科学・芸術等臨地体験	400時間
36単位	共通教養科目			
134単位	専門科学等学修			
			体験学修	1000時間

組もうとしている。

3 1000時間体験学修がめざすもの

「1000時間体験学修」は、島根大学教育学部の卒業要件である。教育学部に籍を置く私たちには、未来の教師たる学生に教育的実践力を確実に身につけさせる社会的責務がある。近年の複雑、多様化する教育問題に日々直面する教師は、その教育活動の中で、より高度な実践的資質、とりわけ、学級経営や個々の子どもに対応した生徒指導上の卓越した能力が求められる。また、生きる力の育成に関わる自然・社会体験に関わる多様な指導力も求められる。この「教育的実践力」は、極論すれば、大学での科学的、理論的学修によって修得可能だと考えられる「形式知」のみでは手に負えない。むしろ多様な教育的体験、実践的経験を通して初めて獲得できる教師としての知恵の領域、言い換えれば、日常の実践を支える「暗黙知」の獲得が不可欠である。

これまで、大学教育としての教師養成教育は、どちらかといえば教育の現場から距離を置いたところで成立していたために、この点で十分ではなかった。1000時間体験学修は、教育的体験や子どもとの直接的なふれあい、現にそこに生きる子ども理解の機会を、学部教育の中に確実にそして組織的・系統的に導入することをめざしたのである。

私たちは、新入生に対し、最初にこの取り組みの意義と目的を次のように説明する。

「諸君が将来就こうとする教師という仕事は、言

うまでもなく、次代を担う子どもの育成に関わる、きわめて高度な専門的職業である。教師をめざし、先生になりたいと考える諸君は、様々な存在する教育課題を解決できる高度な実践的資質＝教育的実践力を身につける必要がある。この教育的実践力を身につけるには、直接的で多様な教育的体験が不可欠である。ここに用意された1000時間体験学修は、諸君を、生の子どもの世界と学校や教育の現場に出会わせるために準備されたフィールドである。今後四年間に諸君が学ぶ教師への道には、大学での学びとともに、このフィールドに待っている多くの子ども達との邂逅がある。諸君が学ぶ島根大学教育学部は、大学における養成教育のあり方を根底から見直し、全国初の必修化に踏み込んだ。諸君は、四年後の自分自身に、職業人としての成熟という課題を課し、教師への夢を育てて欲しい。」

1000時間体験学修プログラムもすでに三年目を迎えた。学生達の体験活動は多様な分野に拡大し学外フィールドは活況を呈している。協力を申し出てくれた市町村も、山陰両県に広がっており、学生自身に企画、実施、評価の全プロセスが任される教育事業も増えてきた。挑戦は今のところほぼ順調に推移している。

地方の小さな教育学部から始まったこの取り組みが、全国の教師養成への取り組みに波紋を投げかけたことは間違いない。成否が見られている。

（たかおか しんや）

家庭科再発見 —気づきから学びがはじまる—

著者 堀内 かおる (横浜国立大学教育人間科学部助教授) 望月 一枝 (秋田大学文化教育学部教授)
西岡 正枝 (横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校教諭) 濱崎 タマエ (東京都練馬区立立田柄第二小学校教諭)

開隆堂では、このほど男女必修の家庭科が実現してから10年余りを経過した現在、これまで家庭科がどのような役割を果たし得たのか。また今後、どのような教科として教育課程の中に位置づけられる必要があるのかを考える手がかりとなる書籍を発行した (定価1,890円)。ここでは本書の一部を紹介する。

●実践例に見る家庭科の独自性

本書の第1章から第3章で述べられている小・中・高等学校における家庭科実践は、いずれもあるテーマが設定され、子どもの実態に寄り添いながらそのテーマにさまざまな角度から迫っていったものである。そしてそのテーマは、現代の社会事象へと子どもたちの目を開く契機となり、子どもたち自身が社会的存在であることへの自覚化を促すようなものが選ばれている。他者やものとの関係性のなかで、自分自身の問い直しを促すようなテーマなのである。

こうしたテーマに基づいて、これらの実践は子ども自身の気づきを重視しながらも、教師が明確な教育的意図をもって学習にさまざまな〈仕掛け〉を行い、子どもたちの思考を転換させたり方向づけたりする役割を担っているところに特色が見られる。

そしてこれらの実践は、きわめて総合的であるけれども、子どもの主体性にすべてを委ねているわけではなく、教師のねらいが明確で、子どもにつけたい力が具体的に意識されている。その意味で、〈総合的な学習〉とは異なる〈教科〉としての体系に位置づいている。むしろ、〈教科〉としての範疇にありながら「総合的な学習」をも内包した、子どもの当事者性に裏づけられて生きてはたらく学びの体系であるといえよう。これこそ、〈家庭科〉という〈教科〉のもつ独自性であろう。

家庭科における学びは、本来、子ども自身の体験をくぐり抜けて思考され、実践を行うことによって経験とな

り蓄積されるものにほかならない。それは、学校で学ぶ知識を意味する〈学校知〉と、子どもたち自身の生活世界のなかで習得される知識である〈日常知〉を家庭科という〈教科〉の学習のなかで重ね合わせてみるという試みである。

多様化する価値観と家庭生活実態を背景として、十人十色の日常知がある。また、たとえば消費文化をめぐる情報のような、〈今の時代〉に生きる子どもたちに共通の日常知もあろう。子どもたちが、まさに今に生きるこれらの日常知を学校知の文脈、すなわち家庭科という教科の枠組みにおいて授業で語り合うなかから、〈生活について学ぶ〉ということのリアリティが見えてくる。

家庭科の教科としての役割は、こうした個々の子どもたちにとっての生活のリアリティの背景を読み解くリテラシーを身につける体系としての学習を用意することではないだろうか。

このように考えると、先行き不透明な時代の教育として、家庭科ほど必要性が認められるものはないといっても、過言ではなからう。受験を前提とした学校知が当面の必要性から重視されることとはまったく別の側面から、家庭科の重要性が見出されよう。

(第4章 第5節より抜粋)

